TADOKU JUNIOR　せかいのなぜなに神話　★★★☆☆ ふつう　555語

The Story of the First Diamonds

はじめてのダイヤモンドのおはなし

Florence Holbrook（1902年の本）　原文そのまま　朗読：Jenn Broda

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？　てきにさらわれた弟をさがしに、兄は旅に出ます。お母さんのモネタは、毎晩山のてっぺんで火をたいて、むすこたちの帰りを待ちつづけて……。

The chief of an Indian tribe had two sons whom he loved very dearly. This chief was at war with another tribe, and one dark night two of his enemies crept softly through the trees till they came to where the two boys lay sound asleep. The warriors caught the younger boy up gently, and carried him far away from his home and his friends.

When the chief woke, he cried, "Where is my son? My enemies have been here and have stolen him."

All the Indians in the tribe started out in search of the boy. They roamed the forest through and through, but the stolen child could not be found.

The chief mourned for his son, and when the time of his death drew near, he said to his wife, "Moneta, my tribe shall have no chief until my boy is found and taken from our enemies. Let our oldest son go forth in search of his brother, and until he has brought back the little one, do you rule my people."

Moneta ruled the people wisely and kindly. When the older son was a man she said to him, "My son, go forth and search for your brother, whom I have mourned these many years. Every day I shall watch for you, and every night I shall build a fire on the mountain top."

"Do not mourn, mother," said the young man. "You will not build the fire many nights on the mountain top, for I shall soon find my brother and bring him back to you."

He went forth bravely, but he did not come back. His mother went every night to the mountain top, and when she was so old that she could no longer walk, the young men of the tribe bore her up the mountain side in their strong arms, so that with her own trembling hand she could light the fire.

One night there was a great storm. Even the brave warriors were afraid, but Moneta had no fear, for out of the storm a gentle voice had come to her that said, "Moneta, your sons are coming home to you."



"Once more I must build the fire on the mountain top," she cried. The young men trembled with fear, but they bore her to the top of the mountain.

"Leave me here alone," she said. "I hear a voice. It is the voice of my son, and he is calling, 'Mother, mother.' Come to me, come, my boys."

Coming slowly up the mountain in the storm was the older son. The younger had died on the road home, and he lay dead in the arms of his brother.

In the morning the men of the tribe went to the mountain top in search of Moneta and her sons. They were nowhere to be seen, but where the tears of the lonely

mother had fallen, there was a brightness that had never been seen before. The tears were shining in the sunlight as if each one of them was itself a little sun. Indeed, they were no longer tears, but diamonds.

The dearest thing in all the world is the tear of mother-love, and that is why the tears were made into diamonds, the stones that are brightest and clearest of all the stones on the earth.

アメリカの先住の人々の、ある部族のかしらには、心からあいするふたりのむすこがいました。かしらはべつの部族とたたかっていて、ある暗い夜、てきのふたりが木のあいだをそっとしのびよって、ふたりの男の子がぐっすりねむっているところまでやってきました。せんしたちは弟をそっとだきあげて、家や友だちから遠くはなれたところへつれさってしまいました。

目をさましたかしらはさけびました。「むすこはどこだ？てきがここへ来て、むすこをさらっていったのだ。」

部族の人たちはみんな、男の子をさがしに出かけました。森のすみずみまでさがし回りましたが、さらわれた子どもは見つかりませんでした。

かしらはむすこのことをなげきかなしみました。そして自分の命がもうすぐつきるというとき、つまに言いました。「モネタ、むすこが見つかってできからとりもどされるまで、わたしの部族にかしらはおかない。上のむすこに弟をさがしに行かせなさい。そして上のむすこが弟をつれて帰るまで、おまえがわたしの人々をおさめておくれ。」

モネタはかしこく、やさしく人々をおさめました。上のむすこがおとなになると、モネタは言いました。「むすこよ、弟をさがしに行っておくれ。わたしはもう何年も、あの子のことをなげいてきたのです。毎日おまえを待っています。そして毎晩、山のてっぺんで火をたきましょう。」

「なげかないで、お母さん」とわかものは言いました。「山のてっぺんで火をたくのは、何晩もかかりませんよ。すぐに弟を見つけて、お母さんのところへつれて帰りますから。」

わかものは勇かんに出かけていきましたが、帰ってきませんでした。お母さんは毎晩山のてっぺんへ行きました。年をとって歩けなくなると、部族のわかものたちが強いうでにかかえて山をのぼり、お母さんが自分のふるえる手で火をつけられるようにしてあげました。

ある夜、大きなあらしがやってきました。勇かんなせんしたちでさえこわがりましたが、モネタはこわくありませんでした。あらしの中からやさしい声が聞こえてきて、こう言ったのです。「モネタ、むすこたちがあなたのところへ帰ってくるよ。」

「もう一度、山のてっぺんで火をたかなければ」とモネタはさけびました。わかものたちはこわくてふるえましたが、モネタを山のてっぺんまで運んでいきました。

「わたしをここにひとりにしておくれ」とモネタは言いました。「声が聞こえるの。むすこの声よ。『お母さん、お母さん』とよんでいるわ。おいで、わたしのところへおいで、むすこたち。」

あらしの中、ゆっくりと山をのぼってきたのは、上のむすこでした。弟は家へ帰るとちゅうで命をおとしていて、兄のうでの中でしずかにねむっていました。

朝になると、部族の男たちはモネタとむすこたちをさがしに山のてっぺんへ行きました。3人のすがたはどこにも見えませんでした。でも、ひとりぼっちのお母さんのなみだが落ちたところに、それまでだれも見たこ

とのないかがやきがありました。なみだは、1つぶ1つぶが小さなお日さまのように、日の光の中できらきらかがやいていました。ほんとうに、それはもうなみだではなく、ダイヤモンドになっていたのです。

世界でいちばん大切なものは、子どもを愛するお母さんのなみだです。だからそのなみだは、地上のどんな石よりも明るくすきとおった石、ダイヤモンドになったのです。

たんご と クイズ はじめてのダイヤモンドのおはなし

sons むすこたち	**forest** 森	**fire** 火
mountain 山	**mother** お母さん	**storm** あらし
tears なみだ	**diamonds** ダイヤモンド	

Q1 モネタは毎晩、山のてっぺんで何をした？

① 火をたいた　② 歌をうたった　③ 星をかぞえた

Q2 あらしの夜、やさしい声はモネタに何と言った？

① 山からおりなさい　② 火を消しなさい　③ むすこたちが帰ってくる

Q3 お母さんのなみだは、何になった？

① 真珠　② ダイヤモンド　③ 星

こたえ

Q1 ① モネタはむすこたちが帰ってくる目じるしになるよう、毎晩山のてっぺんで火をたきつづけました。

Q2 ③ あらしの中からやさしい声がして、「むすこたちがあなたのところへ帰ってくるよ」と言いました。

Q3 ② お母さんのなみだは、小さなお日さまのようにかがやく、ダイヤモンドになりました。

原田英語の多読ベストジュニア

本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。

haradaeigo.com/tadokubestjr/

出典 英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #22420（Florence Holbrook、1902年）。パブリックドメイン。
挿絵：(1902 edition)（同じ本の初版の挿絵。パブリックドメイン）
朗読（Web版）：Jenn Broda（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）
和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは３重チェック。人の目でも順次確認しています。